

『韓国と西洋 フランス思想・文学の受容とその影響』
丁奇洙著、金容権訳（彩流社、2008年）

長谷川 愛

朝鮮はかつて、西洋の人々から「隠者の国」と呼ばれていた。これはこの国が19世紀末までの数百年間、日本と中国以外の国に対しては鎖国体制をとっていたためである。しかし実は、朝鮮は17世紀には既に西洋との接触を持っていたのだという事実は、あまり知られていないのではないであろうか。

本書は丁奇洙氏が1987年にフランスで出版した『La Corée et l'Occident—la culture française aise』（ミナール社刊、1987年）の全訳で、ボルドー大学に提出された博士論文をもとにしている。丁奇洙氏はフランスのボルドー第3大学にて文学博士を取得した人物で、1989年と1993年に、韓国におけるフランス語やフランス文学教育、そして本書の業績等を認められて、フランス政府から教育・文化勲章を授与されている。

本書は、開化期以降の韓国における西洋、特にフランス文化の導入過程とその影響を辿っているものである。大きく分けて2部構成になっており、第一部は「黎明期における韓国と西欧文化の接触」と題し、鎖国時代の韓国の西洋人や西洋文化との関わりについて、第二部では「韓国におけるフランス文化の伝播」と題して、韓国に入って来たフランス文化、主に文学について書かれている。

第一部では、鎖国時代から開国期にかけての朝鮮と西洋とのかかわりを、概説的に分かりやすく記している。本書の第一章は、1653年にヘンドリック・ハメルというオランダ人の一行が航海の途中に台風に遭い、済州島に漂着した出来事の記録から始まる。保護されたハメル一行は朝鮮から出ることを許されず、13年もの長い間そこに留まることになった。朝鮮の人々は彼らの持つ知識や技術に興味を持ったが、それらを朝鮮人が活用したという記録は残されていない。これについて著者は、「ほんとうに価値あるものや思想が朝鮮に来たのは、いつも中国からだったと朝鮮人は信じていた」（37頁）ためであるとし、当時の朝鮮に中華思想が根付いていたことを示唆している。

第二章は、西洋文化が中国を通して朝鮮に入って来た経緯を記している。1583年にイエズス会士として初めて中国に入ったマテオ・リッチ（Matteo Ricci、中国名は利瑪竇、1552-1610）は、中国語に翻訳した本や地図類、科学知識等によって中国の知識人たちに強い感銘を与えた。その影響は朝鮮にも及ぼされ、使臣が1603年にマテオ・リッチの世界地図を持ち帰り、西洋文化研究先駆者である李暉光^{イスクワン}の著書においてマテオ・リッチの著作の内容が紹介されると、それらは儒教の形式主義に疑問を抱いていた若い儒者たちの間に広まり始め、「西学派」という一つの学派を形成していく。一方、それまで北方の清から学ぶべきだと主

張してきた北学派も、使臣に随行して北京に入るうち間接的に西欧文明に触れるようになり、農業や工業に関心を抱いた。また、西欧の暦法についても朝鮮人は積極的に学び、1645年に欽天監正アダム・シャル（Johann Adam Schall von Bell、中国名は湯若望、ドイツ人、1591-1666）が作って中国で採用された「時憲暦」を1653年から朝鮮でも実施した。第一章において筆者が示した中華思想の通り、中国から入って来た西洋文明は朝鮮人たちの間に確実に浸透していったのである。

第三章では、朝鮮に渡って来たカトリックとフランス人宣教師たちについて詳しく述べられている。西学派の中心人物李瀛（이익、号は星湖、1681-1763）は「西学」を科学と宗教に分け、科学だけを受け入れるという立場を取ったが、その弟子たちの中には宗教にも関心を持つ者が現れた。そして1784年には、北京の北会堂で朝鮮使臣随行員の李承薫（이승훈、1756-1801）がフランス人神父から洗礼を受け、朝鮮人初のキリスト教徒が誕生する。彼は帰国後、カトリックを両班や中人階級だけでなく、一般階級や下層民にまで伝道し、広めていった。しかし、キリスト教との両立が可能であるとしてイエズス会が認めていた儒教の祖先祭祀をフランチェスコ会とパリ外邦伝教会が禁じたこと等から、科学や宗教といった区別なく「西学」を迫害しようとする儒者たちが現れ始める。この頃には中国人やフランス人の宣教師が朝鮮に入って来ていたが、彼らの多くは度重なる迫害で殉教した。また、朝鮮人のカトリック教徒も、著名な者は全員処刑、その他の者たちも反逆者として追放された。この迫害は、1871年頃にまで続くこととなった。

第四章においては、いよいよ開国を迫られ始めた朝鮮の様子が描かれている。19世紀の初めには、中国と日本以外の国とは接触しないことが最善の外交対策であると信じていた朝鮮だが、この頃朝鮮の海岸には外国の船が多く姿を見せるようになっていた。1846年には、1839年の己亥迫害において3人のフランス人神父が処刑されたことへの釈明を求めようとフランス艦隊がソウルに向かった。彼らはソウルに辿り着くことは出来なかったが、この一件は朝鮮の西洋への警戒心をより一層強める結果となった。その後、1866年のフランスとの最初の武力衝突以降、朝鮮は欧米諸国と幾度かの武力衝突を起こしたが、1875年9月の江華島事件によって日本の侵略を受けるまで、その門を開くことはなかったのである。

第二部においては、開国期以降に朝鮮に入って来た西洋文化、特にフランス文化、文学に焦点を当てている。第一章では、朝鮮が開国を余儀なくされてから日韓併合に至るまでの間の近代化に向けた動き、フランス文化流入の過程を考察している。開国後、朝鮮は日清戦争（1894年）や日露戦争（1904～1905年）に巻き込まれ、1910年の日韓併合条約によって日本に主権を奪われてしまう。開国から日本による植民地支配が始まるまでの時期の朝鮮は、米国のプロテスタント宣教師によって西洋式の学校や病院が建設されたことなどを契機に西洋に対する理解も少しずつ深まり、近代化を志すようになっていた。この時期の定期刊行物の中には、ルソーやモンテスキュー、ヴォルテールといったフランス作家に触れている記事がいくつかあった。朝鮮で初めての翻訳書は、フランス人宣教師が翻訳したカトリックの教理書であるとされている。1887年には『新約聖書』がハングルで完訳され、以降ナポレオンの伝記や『千一夜物語』などが翻訳された。フランス文献は日本語か中国語からの重訳が主で、

さらにそれら自体も英語から訳されたものであることが多かった。当時翻訳されたものの内訳を見ると、朝鮮の読者の関心は西洋の歴史に向けられていたようだが、ビクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』などの教化的な側面を持つ小説や物語は庶民、中でも婦女子に好まれていた。

第二部の第二章、第三章においては、日本統治時代のフランス文学を巡る動向を、大きく3つの時代に分けて述べている。韓国併合後、朝鮮総督府の武断統治下では、開化期に行われていたような近代化目的での西欧文化受容が危険視され、抑制されたために、朝鮮の知識人たちはその活動を文学に向けるようになった。フランスの作家や作品が数多く雑誌の記事になり、単行本としては出版されなかったものの、翻訳作品も定期行物に掲載された。1919年の三・一独立運動によって日帝の支配が武断統治から文化政治へと転換し、それ以降韓国語の定期行物の発行が増え、新聞や雑誌の西洋文学が話題に上った。記事以外にも1939年までの間に145冊の長編小説が単行本化、1563篇もの短編小説や詩が雑誌に掲載され、翻訳が活発となった。この頃も、フランス語の文献を韓国語訳する際には原文の他英訳や日本語訳が参考にされており、なおかつ自由に意訳や縮訳が行われ、原文と翻訳文の間にずれが生じていた。それを説明するために第三章には、いくつかの作品の原文と韓国語の訳文、韓国語訳を日本語に直訳したもの、原文を出来る限り正確に日本語で訳したものが載せられている。この詳細な比較によって、当時の翻訳がいかに曖昧であったかということ、また、正しい翻訳に出会うことがとても困難であるということを知ることが出来るだろう。

1945年8月15日、第二次世界大戦に日本が敗れたことによって韓国は植民地支配から解放されたが、今度は南北が分断され、朝鮮戦争が勃発するという悲劇に襲われる。第四章では、解放後から1980年までの状況が説明されている。この頃の韓国のフランス文学に関する新聞や雑誌の記事には、実存主義や構造主義について書かれているものが目立つ。ところで、韓国では大部分の作品が、多くの出版社によって何種類もの訳本を出されている。これは、韓国が著作権条約や世界文芸学術作品保護条約に加盟していなかったためである¹。出版社や翻訳家が、拳って利益になりそうな作品に飛びついたことの結果と言えるが、他にももっと数多く翻訳すべき作品があったはずであり、こうした傾向が翻訳の質を低下させたのではないかと筆者は主張している。

第五章においては、韓国で翻訳されたフランス文学の実例を挙げ、その理論や問題点を述べている。西洋作品を韓国語に翻訳する際には、文明や文化に差異があるために細かい注釈や解説による補足が必要となって来る。また、韓国の翻訳者による外来語の不適切な乱用も目立っており、韓国における翻訳が、作品の意味を正しく伝えることに必ずしも成功していないといえるだろう。その原因として、訳者たちの作品理解が不十分であることや、彼らが本来の能力以上に大量の翻訳をおこなわなければならないことなどが考えられると指摘されている。

第六章では、韓国の外国語教育の歴史を三つの時代に分けて振り返っている。開国以前の朝鮮王朝時代には、限られた外交関係の中で必要であった中国語やモンゴル語、日本語等の通訳養成教育が行われていたが、その職は技官の一種とされていたために卑しまれていた。

1970～80年代の開国期には、外国語の必要性が生じたために西洋の言語を教える機関や私立学校の外国語教育が盛んになり、1895年に公布された「外国語学校管制」によって外国語教育の法的根拠が整えられると、既に設立されていた英語学校と日本語学校に加え、フランス語学校やロシア語学校等が建設された。だが、日本の植民地政策が始まるとロシア語学校は閉鎖され、残された他の外国語教育も1911年8月に発布された朝鮮教育令によって不可能となり、この時代の外国語教育は事実上英語と日本語のみであった。

第七章では、解放後の学校教育でのフランス語について触れている。1946年に国立ソウル大学に仏語・仏文学科が設置されて以降、多くの大学がこれに続いた。高等学校でも1954年の各校教育課程時間配当基準令で既に、英語、ドイツ語、フランス語、中国語の中から1～2科目を選択するように定められていた。本書に掲載されている細かいデータからも、解放後の韓国の外国語教育が如何に目覚ましい発展を遂げたかを知ることが出来る。

フランス文学は、韓国の文学に様々な影響をもたらした。韓国における象徴主義やロマン主義、自然主義等の発展には、フランス文学の力が少なからず作用している。そのようなフランス文学翻訳の実例や外国語教育の実際を挙げて分析、考察を加えていること、なおかつ日本語で読むことが出来るという点で、本書は画期的であるといえる。西洋の中でも特にフランスに的を絞っているということも興味深い。著者自身が長年フランス語・文学教育と翻訳に携わっていることもあり、翻訳者・教育者両方の立場からなされた分析は詳細で的確である。

鎖国期には中華思想を重んじ、西洋文化の必要性を全く感じていなかった朝鮮は、いざそれを受け入れようとした瞬間に数々の悲劇に行く手を阻まれてしまう。朝鮮における西洋文化受容の過程は、そのまま朝鮮という国の受難の歴史であるといえるだろう。本書のむすびにおいて、「文化の導入はその文化を伝える言語の導入にかかっている」（295頁）ことが強調されている。日帝支配下での外国語教育規制は、近代化を進めようとする朝鮮にとって大きな妨げとなった。だからこそ解放後の韓国では、中等教育における英語以外の外国語教育が重要視され、現在に至ってもその流れが続いているのだろう。英語偏重教育に傾きがちな日本には、このような韓国の姿勢から学ぶべきことが少なからずあるのではないであろうか。

1 韓国は、1987年に万国著作権保護同盟条約（ベルヌ条約）に加盟した（294頁）。